

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起

―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第一節 大震災前夜における新劇と新劇人

第二節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一

第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その二

第四節 大震災からの復興と築地小劇場への準備

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第一節 大震災前夜における新劇と新劇人

明治維新と文明開化に洗われた日本人の生き方や社会の構造は、明治後半から産業革命、憲法発布、日露戦争によりさらに変貌する。伝統的な歌舞伎にあきたらず、時代の推移に対応する新しい演劇、いわゆる新劇は市川左団次と小山内薫による自由劇場結成を契機としてに勃興した。劇団最初の公演は明治四二（一九〇九）年有楽座でなされ、イプセン晩年の戯曲『ボルクマン』が舞台に供される。鉱山の開発と産業の発展を意図する実業家の物語。演出は小山内薫が担当し、配役として元銀行頭取ボルクマンを市川左団次、妻グンヒルドを沢村宗之助、息子エルハルトを市川猿之助、義妹エルラを市川荳若が演じた。演技は歌舞伎畑の役者が担当し、新劇の特色たる女優の起用はいまだなされていない。①

イプセン作・森鷗外訳『ボルクマン』第四幕

二人は森の木の疎らなりたる狭き高き処に達す。背後に険しい崖あり。左手遙か下の方には入海に

① 河竹繁俊著『日本演劇全史』岩波書店、一九五九年。一〇五〇―一〇五二頁。

接する広やかなる平地を見る。その奥には遠山重複せり。森の木の疎らなりたる処には雪高く積りいる。主人ボルクマンは先に立ち、エルラは跡に付きて、右手より苦し気に雪道を辿り来る。

主人 (左手崖の処に立ち留る) さあ、ここへお出で。お前に見せるものがある。

エルラ (傍に寄る) 何を見せて下さいますの。

主人 (遠方を指さす) まあ、あれを御覧。あの目の前に見えている広々とした土地を御覧。

エルラ 昔あのベンチに腰をかけて、わたくし共は今見える処より、もっともつと遠い処を見ましたのでしたね。

主人 さうさ。あの頃は夢の国を見たのだ。

エルラ (沈黙に頷く) ええ。わたくし共の生涯の夢の国でしたね。今はその国も雪に埋められてしまいました。 (間) そして御覧なさい。あの老木もとうとう枯れてしまっていますね。

主人 (相手の詞を聞かずに) あれ。あの港の外に煙を上げている大きな汽船があるが、あれがお前に見えるかい。

エルラ いいえ。

主人 己には見える。 (間) あれが行ったり来たりして、世界中の人間に交通させるのだ。そういう事にしようと思も昔は夢の中で思っていた。

エルラ (小声に) その夢はどうとう夢の儘におしまになりましたね。

主人 うむ。夢の儘でしまになった。 (聞き耳を立つ) あれ、あの下の方の川の処で。 (間) 聞いて

御覧。工場が器械を運転させているだろう。己の工場が。己が立てる筈であった工場のみんなが。あの器械を運転させている音を聞いて御覧。夜業をやっているのだね。夜も昼もあの通りやっているのだ。聞いて御覧。ね。車輪が渦を巻いてロラが輝いているのだよ。永遠に運転しているのだよ。①

こうした演劇の革新は坪内逍遙や森鷗外による西洋近代劇の導入で準備され、小山内薫と市川左団次による自由劇場の結成で本格化した。大山功による記録『新劇四十年』は、思想統制の厳しい太平洋戦争末期の刊行ながら、万人の幸福追求という理念、自由・平等の原理に照らされた新劇勃興の意義を簡潔に伝えている。関東大震災が勃発し、築地小劇場が興起する一九二〇年代には、維新以来の文明開花を受けて、都市文化と大正デモクラシーが開花する。ここでは資本主義の発展に伴って労働問題の発生と社会主義への関心も顕著となった。

新劇勃興と築地小劇場 (大山功著『新劇四十年』)

新劇はわが既成演劇としての歌舞伎劇、新派劇に反抗して起ったものであり、いわば既成演劇の革新を動機として起ったものである。しかし既成演劇の革新運動は新劇勃興当時に於て初めて起ったものではなく、それは遠く明治十九年の演劇改良の頃にまで遡ることが出来る。この演劇改良会は末松謙澄、外山正一を主

唱者として当時の一流の官僚、実業家、学者、文士等が中心となり、市川團十郎を擁して、既成演劇の革新を目ざして起ったものである。その後尾上菊五郎、守田勘弥等が参加して演劇矯風会なるものへ再組織され、更に明治二二年再び組織を改めて日本演劇協会が設立された。

これらの会の目的とする所は従来のが歌舞伎劇を革新する所にあつたが、結局は彼等の演劇の本質に対する無理解と、それから招来された誤れる写真主義のためにいわゆる「活歴」と称される新歌舞伎劇を残したことと、演劇改良会が理想とした歌舞伎座を建てた以外何等の業績も残さなかつた。「活歴」は近代文芸、近代演劇に於ける写真主義とははるかに縁の遠い、皮相な史実尊重と徒らに高尚上品を銜う当時の官僚的國家主義の道徳的理想を主張した非芸術的な史観にすぎなかつた。・・・

こういう情勢の裡にあつてかつて日本演劇協会の文芸委員たりし坪内逍遙は、早稲田専門学校に文学科を創設し、欧州の文芸、演劇殊に沙翁劇の研究に没頭し、一方制作に志すと同時に演劇の研究、評論を発表していた。そして遂に明治三九年その門下生を擁して文芸協会を起し、演劇の全面的革新に乗りだした。又坪内逍遙と同じ日本演劇協会の文芸委員たりし森鷗外も西洋の文芸、演劇の紹介、翻訳、批評を物し、特にハルトマンの独逸美学の立場から先駆的な意見を發表し、実際の劇壇に多くの示唆を与えていた。そこに新しい演劇創造の機運は漸く動きはじめた。

更に明治四二年洋式の新しい劇場たる帝國劇場の創立が企画され、女優の募集養成が開始された。また一方同じく洋式の劇場である有楽座が完成し、新派の一方の旗頭藤沢浅二郎は単独で東京俳優学校を立てた。そして、これらの新氣運に促進されて文芸協会は組織を一新し、演劇研究所を設立して実際の革新運動に乗りだす色々な準備をととのえた。

このような外面的な事情によって漸く劇壇革新の新機運が醸成される一方、内面的にも新しい演劇創造の素地が出来上りつつあつた。即ち当時の人々、特に若きインテリゲンチヤは、わが國資本主義の發展と西歐自由主義の輸入とによって、漸く封建主義思想、感情をもった歌舞伎劇、新派劇に飽き足らざるものあり、自己の生活感情を充足さしてくれる新しい演劇を願望してやまなかつた。このような事情を背景にして起つたのが、明治四二年の自由劇場の創立であり、明治四四年の文芸協会の運動であつた。そしてここにわが國新劇運動の第一幕がきつておとされたのである。

自由劇場はいうまでもなく小山内薫と市川左団次との共同事業であり、明治四二年十一月第一回試演をもつてそのスタートをきつたのであつた。小山内薫は大學卒業後伊井蓂峯一座に關係して演劇の實際を研究すると同時に、日本演劇の批評等に筆をとつていたが、秘かに商業演劇の前途に深い憂慮を抱いていた。一方市川左団次は父を亡つて以来、明治屋の孤墨を守つて奮闘していたが、明治三九年松居松葉に従つて渡欧し、西欧の演劇の實状を視察し翌四十年帰朝した。そして彼の地の演劇界の情勢に深く刺激され、演劇革新を目ざして敢闘したが、当時の人々には却て冷罵を以て迎えられ、迫害さえうけやうとした。このような環境と立場におかれた二人が、昔日の交流を層一層深め、ここに相携えて新しい演劇運動を起すべく創立したのが、自由劇場に外ならなかつた。・・・

大正十二年の震災によって東京の主なる大劇場は殆どみな灰燼に帰して、再び演劇なぞの復興は何時の日か分らないという状態になつてしまつた。しかし復興事業は意外に早く進捗し、演劇娛樂等に渴望する民衆は次ぎつぎに建てられるバラック式の劇場へ殺到するという現象を招来した。第二期に於て殆どその姿をかしたかにみえた新劇団も次ぎつぎに再生してきたが、殆ど仕事らしい仕事をするこなく消えていった。

それらの中で最も大きな業績を残した中心的存在たるものが築地小劇場であることはいうまでもない。築地小劇場はかつての自由劇場の指導者であった小山内薫と、氏に師事して演劇研究のため独逸に滞在していた後進土方与志との共同事業である。①

二五歳にして襲名し、明治座座元を引き継いだ二代目市川左団次は、明治三十九年亡父の追善供養のあと九カ月の海外旅行に赴いた。まずパリでは『ノオトルダム・ド・パリ』の舞台に接し、女優サラ・ベルナルとも会見する。ついでスイスの湖畔にウィリアム・テルの墓を訪ね、イタリアではミケランジェロの天井画に感嘆。ベルリンではイブセンの『社会の柱』やゴリキーの『どん底』を観劇し、さらにイギリスへわたって俳優学校を參觀するとともに、シェイクスピア祭に際して『ジュリアス・シーザー』等に接した。こうした研鑽の成果を抱いて帰朝後の左団次は、劇場と演出の改革に着手し、明治座で『ヴェニス商人』を上演するものの、徒らに反発と嘲罵を浴びるのみである。以後数年不振と失意が続くなかで、旧友小山内薫はたえず彼を励まし、扶け合うふたりの先覚者が、やがて自由劇場の創建へと前進した。②

① 大山功著『新劇四十年』三香書院、一九四四年。一三一―一七、六七頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』南光社、一九三六年。九〇―一九四、九八一―〇四頁。

小山内薫「市川左団次の半生」(『小山内薫全集』春陽堂、一九三二年、春陽堂。第五巻、六七二、六七六―六七五頁。)

市川左団次・小山内薫の自由劇場結成 (『左団次芸談』)

小山内君をそもそも私が知ったのは十七、八歳の頃で、その当時私は雜俳に凝って元数寄屋町の鶯亭金升氏の門に通っていたので、その運座で始めて顔を合わせた東亭扇升、又の名富士見小僧と云ったのが小山内君で、まだ軍人志願の中学生時代で、その後高等学校の文科に入ってからは余り運座には顔を出さず、大学時代は伊井一座の真砂座に関係していて、私の洋行から帰った頃には浅草の瓦町に住んで真砂座とも関係を絶ち、専念演劇の研究に没頭して、その研究の結果をば聞かしてくれましたので、非常に心強く思ったが、私の劇場制度改革の失敗当時のことを、小山内君は「この興行中私は毎日のように彼を楽屋に訪ねた。私は出来る限り彼の〈孤独〉を慰めた。彼は誰にも云はぬ憤激を私に洩らした。十何年唯ぼんやり付合ってきた私と彼は、この時初めて本当の〈友達〉になったような気がした」と書いてある。

そうして仁左衛門氏が明治座に一座していた明治四二年の三月のことであった。私は楽屋へ訪ねてきた小山内君をとらまえて「いつ迄こんなことをしていても、きりが無い。この間から話している計画を是非とも実行しようではないか。一年に一回でも二回でもいいから、実際に自分のしたいと思う芝居をば演ってみよう」と、相談したのだった。

小山内君とても勿論賛成である。然しひどく謙遜して、今の自分の学問ではまだ到底不十分であるから、みっちり勉強をする間、もう十年待つてくれなしかと云いだした。けれども私は、そう云えばそうでもあらうが、然し今出来ないことは、十年経っても出来ないに違いない。思い立った以上は、直ちにやらなければ

駄目だ、と促し立てた。全くのところ、自由劇場はただこの勇氣だけで出来上ったのであった。

従ってこの事業は世間からはかなりに危惧の念を以て迎えられた。然し興行演劇に於ては自分の思う儘に芸術家としての使命を果すということが出来なかつたので、興行演劇を演らねばならぬ位置に置かれた私としては、この自責の念に全く苦しみ悶えていたのであった。そうしてせめては此自由劇場に依って俳優としての使命を果し、本来の演劇に為に尽したいと熱望したのであった。……

「始めて劇評の筆を執る」と書かれて、森田草平氏は縷々と述べられて、「これを要するに、今回の自由劇場第一回試演は予想外の大成功であった。それは役者の手柄でもなければ、背景のお陰でもない。直接イブセン自身の効果である。従ってイブセン劇を始めて日本に輸入した小山内薫、市川左団次の手柄である」と評された。

故鈴木木泉三郎氏は『俳優評伝左団次』の巻のなかでその時の模様を誌しているが、「第一回試演を行った時のわれらの感動と云ったら、まア何と云ったらよからうか。丁度心の内に描いていた夢のような恋が叶った時の喜びにも似ているのであろうか。一人の友達はずこし取逆上せたのではあるまいかと思う程な、はしやぎすぎた態度と表情で、上ずった声でその夜は明け方近くまで、わたしの部屋でおしゃべりをしていた。も一人は一緒に芝居を見ている内に、陰気に黙り込んで仕舞って、はねてからよそで少しばかりの会食の間も、涙ぐんでいるやうに見えて、話し声など震えていた。」①

① 市川左団次著『左団次芸談』一二八―一二九、一三九―一四〇頁。

陸軍軍医たる父を幼くして喪くした小山内薫は、つとに東京帝国大学の学生時代に、文芸雑誌『万年草』に投稿し、森鷗外と上田敏の知遇を得た。鷗外を介して新派の俳優伊井蓉峰に紹介され、彼は深川の芝居小屋『真砂座』に迎えられる。小山内薫と二代目市川左団次とにより結成された自由劇場は、明治四二（一九〇九）年初の公演として新築の洋式劇場、有楽座でイブセンの戯曲『ボルクマン』を披露した。その翌々年渋沢栄一を創立委員長として帝国劇場が落成し、自由劇場の公演は以後ここで行われる。やがて小山内は演劇視察のためヨーロッパ諸国を歴訪し、モスクワ芸術座でゴリキの『どん底』等に感銘を受けた。① 大正三年帝国劇場では芸術座の島村抱月演出、松井須磨子主演によってトルストイ原作『復活』が上演され、その主題歌『カチュシャ』が世を風靡する。一方帰国した小山内は同年やはり帝劇でゴリキの『夜の宿』（『どん底』）を演出するとともに、島村・松井に対抗して有楽座でアンドエーレフの象徴劇『星の世界』を有楽座で上演。自由劇場の公演は以後四年間中断し、大正八年に復活するも不評に終わった。この間に彼は大劇場の営利主義や興行の低俗化に違和感を募らせる。小山内の慨嘆「新劇復興のために」は大正六年より雑誌『新演芸』に連載され、商業演劇への失望と訣別が表明された。

① 小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。五一、八二―八四、

一〇五―一〇六、一二二―一二三、一二九頁。

商業演劇への失望と訣別（小山内薫「新劇復興のために」）

日本の「新しき芝居」よ。哀れな日本の「新しき芝居」よ。お前のこの頃の瘦せようはどうだ。お前のこの影の薄さはどうだ。お前はオイケンやベルグソンやタゴオルのように、やっぱり「一時の流行」であったのか。

お前が始めて外国からこの国へ渡って来た時、この国の所謂「有識者」はどんなにお前を歓迎したろう。どんなにお前を有難いものにしたろう。そして、どんなにお前を無くではならぬものにしたろう。

然るに、今日のお前はどうか。お前は僅かに「田舎廻り」に生きている。お前は辛くも浅草公園に生きている。そしてもう「有識者」とは何の関係もなくなってしまった。「有識者」の末流とも何の交渉もなくなってしまった。……

お前がほんとに莫迦にされ始めたのは、あの「カチュシヤの唄」からだ。『復活』は、お前にとって『復活』ではなかった。『復活』ではなく、『死滅』だった。「カチュシヤの唄」で当った『復活』トトルストイにはほんの僅しか関係のない『復活』――まるで黙阿弥の芝居を見るようなセンチメンタリズムの『復活』――あれから、お前の本当の姿は段々舞台の上に見られなくなった。お前は段々名前ばかりになった。そして、名前ばかりのお前がお前だとして、今までお前を見た事もない人達に喝采され出した。そして、今まで不完全なお前の姿の内にも本当のお前を求めてやまなかった人達が、段々お前を遠ざかるようになってしまった。

芸術座が「二元の道」を説き出したのも、丁度その頃だったろう。「二元の道」とは何の事だ。簡単に言えば、一方では神に仕えながら一方では人に仕える事だ。そう言うのが若しむづかしえれば、一方では金儲

けをししながら、一方では芸術家になろうというのだ。即ち、少しは俗衆の媚びても、先ず金をうんと儲けた上で、それから損得を顧みない純粹な芸術を見せようというのだ。……

『復活』で味をしめた芸術座が二元の道を説き出してから、お前は本当にみじめな目を見始めたのだ。お前はやがて浅草の六区へ連れて行かれた。お前は大阪俄や活動写真と一緒に陳列された。そして、あの埃だらけな、外から見通しな野天のような舞台で、薄暗い醜い光の中で、臭い息と噓せるような烟の籠った空気の中で、耳も聾になりそうな騒がしい物音と人声の中で、八公熊公の前にお前の姿を晒さなければならなくなった。あたりが騒がしい為に、役者の声は段々高く叫ぶようになった。あたりが騒がしい為に、役者の目は段々大きく見張るようになった。役者は群衆の勢に負けまいとして、舞台の上で出来るだけ荒ばれた。哀れな日本の「新しき芝居」よ、かくしてお前は咽喉を割られたり、まなじりを割られたり、手足を抜けほど引っ張られたりした。無慚に傷つけられたお前の魂は、やがて公園の池に投げ込まれてしまった。……

「新しい芝居」よ。決して失望してはいけない。決して落胆してはいけない。お前の本当に立つのは寧ろこれからだ。今までお前に追従して来た者は、みんな嘘の人間だ。今のような姿になったお前を見捨てないで、もう一遍これからお前を守り立てて行こうという人が、本当にお前の味方なのだ。①

築地小劇場の創立者土方与志は、伯爵土方久元を祖父とする。久元はかつて土佐藩勤王の志士であり、文久三

年三条実美らの七卿落ちを護衛。やがて坂本龍馬等とともに薩長連合を支援し、幕府を大政奉還へと追い詰めた。維新後彼は男爵に列せられ、第一次伊藤博文内閣では農商務大臣と宮内大臣を歴任する。① その孫与志は幼くして父を喪くし、二十歳若さで爵位を相続する。学習院中等科に在学の際からイプセンなどの戯曲を読み始め、帝国劇場で『ジュリユアス・シーザー』の舞台にも接した。また、素人劇壇の友達座を同級生と組織し、みずからは舞台監督を担当する。以後帝国大学文学部に進学して、小石川の自邸に模型舞台研究所を設け、友達座によるメーテルリンク作『タンタジールの死』を渋谷福沢桃介郎の丸太小屋で披露。一九二〇年帝国劇場の公演記録には、ワグナーの楽劇『タンホイザー』星の歌巡礼の場』総指揮山田耕筰、合唱指揮近衛秀麿に加えて、演出土方与志と誌される。その翌年土方は山田耕筰の紹介で小山内薫を訪ね、弟子とされるよう懇請し、試練として明治座にて市川左団次一座の『俊寛』に舞台装置を施した。②

人生の煩悶とヨーロッパ留学（土方与志「灰色の築地小劇場」）

一九二〇年私は職業的演出者となるために、小山内先生の助手として徒弟的な修行をつむことになった。

① 渡辺修二郎著『評伝 松方正義・土方久元』同文社、一八九六年。一七一―一七五頁。

土方久元著『回天実記』東京通信社、一九〇〇年。四頁―

② 土方与志「自伝」（『土方与志演劇論集 演出者の道』未来社、一九六九年。三九五―三九七、四〇一―四〇二、四〇六―四〇九頁。

そして先生の戯曲『第一の世界』に、初めて演出を担当することが出来て、とにかく劇団にデヴィューした。

この頃は私生活の上では、いわゆる学爵と一緒に先代の遺していった三十余万円の借金の整理も一形つけ、其の結果数万円を浮かせ得たので、ほっとしたところだった。しかし、この時代にまきおこったデモクラシーの波は、私のようなものをいろいろ考えさせた。なお、周囲の特権階級の中にある横暴や虚偽や矛盾に対しても人並みの不満を感じずにはいられなかったし、まだ〈河原乞食〉などの観念があつて、私の選んだ道には相当の石ころがあつた、

特権階級の一員として、また有産者としての不安や事績や、一九一八年頃からの「演劇における理想主義者」としての、当時の劇団に対する不満や、特に小山内先生のすすめによって初めて知った平沢計七氏の指導していた労働劇団に対する異常な感激等で、どうにもならないあせりを感じていた。

私は息苦しくもあり、面倒臭くもあり、誰に何ともなく腹だたしくもあつて、日本を離れようと考えた。その結果としてどこへというあてもなく、漠然と、しいて目的をつけられ、優れた演劇を学ぶことの出来るヨーロッパのどこかの国に行こう、しかしいつまでということもはつきり考えずに、また出来たら家族も次第に呼び寄せて、移住してもいいつもりでさえいた。一九二二年私は一人で外遊の途に上った。……

パリについた。エトワール凱旋門の近くのオテル・パンシヨンの北向きの屋根部屋におさまった。モスクワ芸術座のソヴィエト国外客演第一夜の『どん底』を見たのはその夜だった。私はこの夜の観劇およびその後毎夜芸術座の上演を見たことを今にして思えば、稀有の幸福であつたと考えるが、またこの観劇は、ここに語ろうとする築地小劇場九年のためには決して幸福のもでなかつたといわねばならない。私は『どん底』『桜の園』『ステパンチコフ村』『村の一日』等を連夜見つけた。これら旧ロシアの生活を描いた作品は、

もちろんロシア語のわからなかった私が深く内容を理解することは不可能であったが、私に激しい観劇を与えてはくれなかった。『どん底』の上演も、なにか完成美というようなものは感じたが、ひどく平板なものに感じられた。……

当時パリの劇壇は非常に盛んであった。国立劇場のほかに多くの小劇場も、それぞれの特長をもって存在を主張していた。私の最も多く訪れたのは、ジャック・コポアのヴィユウ・コロンヴィエ座と、北欧の近代劇を多く演じるリュネ・ボーの創作劇場であった。私は暮から正月にかけて率直にすべての観劇の印象を小山内先生に報告した。

一九二三年一月ベルリン大學に演劇科が開かれると聞いたので、ルール占領、そしてさらにヨーロッパ戦争の再発の噂をよそに、フォッシュ將軍の軍隊と一緒に汽車でベルリンに着いた。……当時ベルリンは表現主義演劇の最盛期であった。私はゲオルグ・カイザーの世相的戯曲の上演や、またエルンスト・トラウ、カール・チャペック等の作品に興味を感じた。革命的演劇運動はまだはつきりと現れていなかった。エルウィン・ピスカールなどは場末の劇場で、トルストイの『闇の力』などを上演していた。①

貧しい母子家庭で育った山本安英は、内職に追われる母を幼いときから気遣い、やがて東京の伯父母に預けられて女学校に通った。医家である伯父は謹厳であったが、伯母の好意で踊りや長唄を稽古し、月刊『演芸画報』

① 土方与志「灰色の築地小劇場」(『土方与志演劇論集 演出者の道』一一一―一一三頁。

の耽読を楽しむにする。新聞広告で知った市川左団次の俳優養成所に応募し、小山内薫の面接を受けた。大地震の二年前、大正十二年暮に彼女は、小山内の戯曲『第一の世界』に抜擢され、帝国劇場において初舞台を踏む。この師走興行には土方与志が演出に加わり、市川左団次や市川猿之助らの共演で好評を博した。①

帝劇初舞台まで (山本安英『新版 歩いてきた道』)

とりとめのない思い出は、もう私が小学校に通い始める頃、例の祖父はすでにいず、母と三人の弟と、やはり横浜の一隅に貧しい暮しの日々を送っている頃からはつきりとして来ます。共に寝起きする父というものが私にはありませんでした。父は時々気弱そうな美しい面だちに眼鏡ををかけ、長髪に琴の糸で織った被布で私の家へ現れ、おみやげの牛肉を自分で料理して私たちに食べさせては、すぐまたどこかへ行ってしまっただけの人でした。谷文晁の流れを汲む絵師で、それから茶の湯や生花を教えたというこの父が、母に對して使う「あなた」とか「そうです」とか、時には軽い調子ながら「ごさいます」というような言葉づかいを、子供心にも言葉がきれいというよりも何か遠慮勝ちなものに私が感じるのです。

どうして別居しなければならなかったか、その複雑な入りわけを、いまだ私は母に聞くこともできずにいるのですが、父の方には私たちの生活を助けるだけのゆとりが全く無かったらしく、私の覚えている限り、母はいつも朝から晩まで四人の幼い子供のために、心臓の悪いからだを働きづめに働いていました。……

ただ一つにすぎりついていた「職業」というのは、父の紹介だったのでしよう、「はま」のえはがき屋で売っている外人向けの写真やガラス絵に彩色をする下請けの仕事でした。・・・それを私が幼いなりになんとか手伝いをしようと思って手を出すと、母はいつも厳しく私を叱りました。貧しくとも子供だけは卑屈にさせたくないというその母の気もちを察することができたのは、もちろんずっと後のことでしたが、その頃は叱られるのがわけもなく淋しくて、やっと願って私と一番上の弟とに許されたただ一つの仕事は、えのぐを洗って色のついたどんぶりの水を、日に何度か取りかえる仕事でした。・・・

小学校もだんだん上級になって来ると、母も少しずつ私に仕事をさせてくれるようになっていました。引っこみ思案のくせに負けん気だった私は、出来上った品ものをお店に届ける役を引きうけて、ふろしきを抱えては油の音のじゅうじゅうしている南京街を抜けてお店へ通いました。夕方などお腹をすかして、せまい南京街の裏通りのあちこちから流れて来る油の匂い、肉の匂いの中を、子供ながらもわびしい気持で歩いたものでした。・・・

芝居も幼い頃祖父や「ばあ」につれて行ってもらった以外は殆んど記憶がなく、ただうちの患者待合室におくため毎月とっていた『演芸画報』は、私の待ちきれない楽しみで、ずいぶんくりかえしよみふけたものでした。新しい劇というものは、まだ社会的にははっきりした地歩を持っていない時代ですし、思想的にも社会的にもものを見る見方が多くの人々の口の上ようになったのはそのしばらく後のことで、ですからこの頃私があこがれていた芝居の世界というものは、ただ漠然と「芝居の世界」として私の頭の中に画かれていたものにすぎませんでした。それともう一つは、前に書いたようにやはり私も何か職業をもって働きたいという気もちを持っていました。そのときの私自身の境遇は、そういうことを必ずしも必要としてい

なかったわけですが、横浜でいまでも二人の小さい弟を抱えて細々暮らしている実母の事を考えると、たまらない気もちだったのです。私は毎朝あけ方にそと家を抜け出して、赤坂の円通寺までお百度をふみに通いました。今考えると少々恥かしい気もちもありますが、ただただ何とかして自分の念願を通したいという一途なもので、別に何かを信仰するという気持ではむろんなかったのですが、それは自分でもかわいらしいと思う程ひた向きな気もちで、その折円通寺の尼さんから頂いたガラスの数珠を今でも大切に持っています。

何かの話にあるように、二一日目の満願の日、玄関を出ようとしたとたん、投げ込まれた新聞に私は、市川左団次さんが松竹をバックにして、現代劇女優養成所の生徒を募集する、という記事を発見しました。私は養母に無理をたのんで、父に内密でこの試験を受けたのです。

新富座の芝居茶屋（猿屋）の二階は、応募者で一ぱいになっていました。母親について行ってもらったのは私だけだったので、少々気まりの悪い思いもしましたが、この時の試験場で初めて小山内薫先生にお会いしたのです。そしていまだによく理由の判らないのですが、その中から選ばれた五名の一人に私は入る事ができました。・・・当時二四歳だった土方与志先生も、この養成所に関係されていて、実技を教えてくださいました。

初舞台は一九二一年十二月、帝劇で小山内先生作の『第一の世界』で、演出は―その頃は演出とよばずに舞台監督と言っていました―が小山内、土方与志の共同になるものでした。当時まだ猿之助、長十郎さん方も一所だった左団次一座に、師走興行なので中車、小団次、松助、宗之助、寿三郎さん達も加わった大一座で、出しものは『増補信長記』『第一の世界』『奥州安達原』『鳥辺山心中』『拾遺太閤記』の順で五本立てでした。私は左団次さんの娘役で台詞も沢山あり、先生方の御苦労は大へんだったろうと、今になってよく

判る気がします。下廻りの役者さんから「あたしなど永年芝居をやっているけど、まだろくに舞台で旦那（左団次さんのこと）と口をきいた事がない、そんな役をふられたら、あしたしんでもいい」などとうらやましがられたものでしたが、左団次、松蔭さんを始め松助さんなど一座の方々は、本当によく面倒をみて下さいました。階級制度のきびしい歌舞伎の世界には珍しいことで、ここにもやはり一座の方々が、新しい芝居を開拓してゆこうとされた熱意がうかがわれる気がします。

この養成所はこの公演をやっただけで、どういう事情からか翌年の春までで終わってしまいました。それで私はまた家庭へかえることになり稽古ごとをつづけながら、時々小山内先生のお宅などにもうかがいつつ、またその間にはライオン児童齒科医院に勤めたりもしましたが、そこに起ったのがあの関東大震災だったので。

①

東山千栄子（本名渡辺せん）の祖先は下総佐倉藩の家老であって、父渡辺暢は高等法院院長を務め、貴族院議員に勅選された。兄弟姉妹の多い東山は、小学三年のとき後継ぎのない叔父寺尾亨のもとへ養女として引き取られる。そこでは社交界に出るべく早くから育てられ、華族女学校に入学するとともに、雙葉学園でフランス語をも学んだ。法学博士の養父寺尾は謹厳であって、花嫁となるべき娘に小説を読むことも、芝居を観ることも禁じたとされる。男女交際についても厳しく、花婿の候補者を養父母が選び、彼女は十八歳のとき、原合名会社モス

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』未来社、一九八七年。八一〇、一五一―一八頁。

クワ支店長の河野通久郎と結婚した。一時帰国した通久郎と京都での新婚旅行を済ませた後、明治四二年ウラジオストツクを経て、シベリア鉄道で着任地へ到着する。折しもモスクワは帝政ロシアの末期、ロシア革命の前夜にあった。彼女の自伝には夫河野の演劇に対する深い理解やロシア革命による日本への退去も述べられる。①

モスクワでの生活と観劇（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

モスクワには主人がアパートを用意してくれました。五部屋ぐらいあり、六十歳になるフランスとポーランドの混血の家政婦のおばあさんと、若いロシア人の女中がおりました。おばあさんは主人から私を紹介されると、両手で私を抱き、両ほおとくちびると、三ツキスしました。はじめての経験なので、私はビックリしてしまいました。

こうしてモスクワでの私の生活ははじまり、八年間をここで暮らすことになったのでございます。そのころのモスクワはやっと数カ月前に日本総領事館が設けられたばかりで、日本人はその方たちを含めても八人ぐらいしかおりませんでした。女性はそれから三年あとまで私ひとりでした。……

主人は文学や音楽を愛好しておりましたので、私に小説を読んで人生を知ること教え、またバレエやオペラやオペレッタに私を連れて行ってくれました。そのころにロシアは、帝政時代の爛熟期で、ましてモスクワは芸術の中心地でしたから、私は芸術に対する目をしだいに開かれて行きました。ポリシヨイ劇場で

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』産業能率短期大学出版部、一九七七年。四一五、九一〇、一七二―二〇頁。

はじめて『白鳥の湖』を見たときの驚きと喜びは、いまでもわすれることができません。舞台の広さ、百人以上の踊り子たち、舞台装置のすばらしさ、音楽のうつくしきー明治の末期のころ、しかもお芝居やバレエなどをまったく知らない私だったのですから、私の驚きを想像していただけるでしょう。……

モスクワではじめて見たお芝居は『桜の園』でした。その夜は主人が旅行者のご婦人をご案内し、私もはじめて芸術座にまいりました。私はこの高名なお芝居に対して何の予備知識も持っておりませんでしたし、同行の方からそのころ日本で出版されていた瀬沼夏葉女史の翻訳本をみせられたのも、劇場へ行ってからのことで、それも幕間にただチラチラとページをめくったくらいだったのです。

しかしそういう私が、その『桜の園』にすっかり魅了されてしまったのです。脚本が傑出していううえに、モスクワ芸術座の創立者のひとりであるコンスタンチン・スタニスラフスキーの演出でありますし、その演出者自身が兄ガーエフの役で出演、作者チエーホフの未亡人オリガ・クニツペルが女主人公のラネーフスカヤ夫人に扮していたのですから、私ならずともそのすばらしい舞台から深い感銘を受けずにいられなかったことでしょう。

このとき私は、将来自分が俳優になるだろうとか、『桜の園』をやるだろうとかは夢想さえしていなかったのですが、それがこんなにひきつけられたというのは、あとになって考えてみると、後年私が俳優になる動機がこのときあったような気がしますし、しかもその私が、やがてラネーフスカヤ夫人の役を三百回前後も演ずるようになったことの、いわば因縁のようにさえ思われます。……

のちの築地小劇場の創立者のお一人、小山内薫先生にはじめてお目にかかったのは大正元年でした。先生はモスクワ芸術座見学のためにおいでになり、それからドイツ、イギリス、フランスとお回りになって、シーズン・オフに再びモスクワに戻られ、しばらく滞在なさいましたが、このときは私の家でお宿をいたしました。先生と私の主人とは、以前に日本でお知り合いになっていたのです。

モスクワ芸術座では先生はちょうど画家が名画を模写するような敬虔な態度で、スタニスラフスキーの演出を克明にノートなさいました。先生はモスクワ芸術座で、まえにご自身が先代市川左団次さんたちと自由劇場で上演なさったことのあるゴーリキの『夜の宿』をはじめとして、チエーホフの『桜の園』『三人姉妹』『伯父ワーニャ』などをごらんになりましたが、それらについてのノートが、のちに築地小劇場で生かされたのです。

しかし、ここに書いたすべての演目に、やがて私が出演することになるうなどは、よもや先生はお考えにならなかつたでしょうー当時の私はまったく支店長夫人であり、人妻以外のなものでもなかつたのですから。また小山内先生はスタニスラフスキーの家庭に招かれ、一座に俳優さんたちと親しく遊んだりなさったことを、楽しそうに話していらっしゃいました。①

ロシア革命とモスクワからの退去（東山千栄子著『新劇女優』）

ひとつ主人に最も感謝しなければならないことがあります。それは窮屈な生立ちをしたために全く閉じられてしまっていた私の眼を、文学、音楽、演劇など、あらゆる芸術の世界へ開けてくれたことで、私の退屈

であった人生は、どうやらそこから息づきはじめました。・・・河野はその文学好きのまま法科を卒業して海外貿易に入りましたが、これは当時の世界の経済事情に感ずると共に、困難であった生立ちの経験からも、経済力の確立が第一、何ごともその上で考えたものでございましょう。原輸出商会に入って直きにリヨン支店詰めとなり、ずっと日本を離れて暮しました。それで日本の文学の動きが次第にわかりにくくなったのでしようか、その代り小説類の原書の入手は思うままでしたし、音楽にしても演劇にしても、日本では思いも及ばぬ本舞台のものに接し、初めは手探りから次第に自分一個の鑑賞力を得て、殊にモスコーにいったからは、丁度爛熟期の露西亜芸術に心ゆくまで親しみました。・・・

やがてこの重苦しいまでの芸術的雰囲気にあったモスコーが、あの歴史上永遠に記録すべき革命の一撃によって破壊される時が来しました。私共はその革命前に何も知らず、暫くの休暇をいただいて日本へ旅立ちました。そうして東京に帰っていて現場に居合わせなかつたのは幸か不幸かわかりませんが、私共の住居は丁度クレムリン宮殿と士官学校の間の処にございました。東京にいて号外で革命を知り、次の報道を待っても、今のようにラジオなどで迅速にわかる時代ではありません。重大な時に店を留守にしていたことですから、主人の心痛も一通りでなかつた次第です。幸いに店の人達も無事に脱出して帰り、その話で、瞬間に打込まれた銃火に焼けた店や住居の様子もわかりましたが、その人達は言いました。「支店長夫妻がいなかつたのは、幸いだった。もしあの場所にいたならば生命の危険はもとより、何かを取出そうとして火の中に飛込んだかも知れない。」そういわれて私共も黙する外ありませんでした。

勿論家庭のことで見ても、主人が独身の時代の七年に、私が行ってからの八年を加えて、十五年の間に自然と出来ていた物一切、モスコーにあるのが私共の全部でしたから、故国の空に旅着の着のみ着のまま、これだけで振出しの無一物に戻ったという有様でした。間もなく領事館の引き上げとなり、主人が十五年苦心のあとも全く水泡に帰しました。主人の落胆するのも道理、実に主人のモスコーにおける信用は、もう充分にその後の仕事の堅実な成功を保証してあまりあるものであったのです。そして主人の文学的氣質が何処よりもよく合う露西亜であったのです。①